

馬場啓之助
『近代経済学方法論』

勁草書房 1961年 258ページ

書名は『方法論』だが、哲学者の名前は数えるほどしか出ない。強いて挙げれば、左右田博士、杉村博士、A・シジウィック、ペンサム、M・ウェーバーなど。

わが国で『経済学方法論』といえば、まず、哲学の説教がつづき、それから経済学において、天降り式に経済学説を是非する書物が多いが、その点この書物は完全に趣を異にする。哲学の権威を利用して経済学を論評するのではなく、逆に専門経済学者の経済学について、そこに滲む哲学的側面をとり上げ、この側面について、エコノミストないし社会科学者の立場から、原理的に思索しようとする。

著者馬場啓之助教授については、やはり、多少紹介の必要があろう。馬場教授が左右田博士・杉村博士・本多謙三が形成した伝統の下に育ち、その後日本農業のすぐれた専門家として立派な業績を挙げていることは周知のとおりである。かように教授はすぐれたエコノミストであり、いわゆる「近代経済学」についての教授の理解は改めて言う必要もないが、同時にまた、近著『マーシャル』(勁草書房、昭和36年)が示すように、「経済学」の精神についても深い理解と反省とをもつ人であることは、強調しておく必要がある。教授のこの近著は、わが国のマーシャル研究を劃期的に前進せしむべき好著であり、教授のすぐれた学識を示すに足るが、同時にそれは、経済学の任務と機能とについての透徹した把握のあらわれでもある。

かように本書は、哲学に非従属な方法論の書物だが、それでは『近代経済学方法論』の名の下に著者はいったい何を説こうとするか。

経済学が物量(経済的数量)の考察に重点をおくあまり、人間・社会・歴史を忘れすぎるといふ批難は、しばしば聞かれるところであるが、著者もこの批難にくみする。著者の(近代)経済学に関する3課題説(p.51.)のごときもこの立場にもとづくが、ここから「社会科学としての経済学」の建設の要求がでてくる。本書はこの「社会科学としての近代経済学」の立場の方法論といっている。

さて、経済学に人間・社会・歴史の観点を加えようとする場合、すぐ想到されるのは、近代経済学に歴史派経済学ないし歴史主義の成果を加味する行き方である。し

かし著者はこの月並みの構想をとらない。著者によれば、歴史派と近代経済学とは、補完的なのではなく、いわば渋柿と未熟の葡萄のように、欠点を共通しているのである。この共通の欠点をとりあげ、それぞれについて成熟の方途をかんがえる点あたりから、著者独自の展開がはじまる。やや立入ってのべよう。

割り切りすぎるかもしれないが、経済学は本来応用的・实际的な学問だときめてかかると、話が簡単になる。理論は現実に応用されねばならぬが、「仮説としての理論が応用によって検証をうけ、そこから方法論的反省がおこる」換言すれば、「方法論の問題は応用そのものが含む理論的な問題であり、経済理論と(歴史的)現実との交渉の含む理論的な問題である」(p.22, 28. など)。著者が「経済学の限界領域」という概念を設定するのも、この立場からである(序, p.28, 85, 172, 206.)。

この場合、この理論と現実との交渉の問題、(とくにいわゆる限界領域)について、何か方法論の体系を著者に要求することは、もちろん、無理である。本書はもともと論文集から出発しており、それぞれの論文が、この問題系列の主要問題を取り上げて著者の志向を例示する形になっているが、つぎに、そのうち代表的とおもわれる2章、第2編「経済形態と経済組織」I「経済発展の思想と理論」、第1編「社会科学としての近代経済学」III「社会科学としての近代経済学」を紹介してその狙標をつたえたい。

第2編Iの「経済発展の思想と理論」と題する論文(pp.166~209.)は、本書の中で、著者のヴィジョンが最もよく現われている論文といってよからう。

ここで著者は表題のとおり経済発展の問題を論ずるが、その場合主軸となるのは、「形態論的な見方」と「組織論的な見方」との対照という独自の著想であり、この枠組みの設定(プラス「限界領域」の考え)を利用して、古典派・歴史派・現代の諸経済学の経済発展論を縦横に批判し、一層の成熟のための視角を提示しようとする。

それでは「形態論的な見方」あるいは「組織論的な見方」とは何か。例えば、資本形成を例にとっていえば、資本形成の社会的制約に焦点をおくのが前の見方であり、これに対して資形成を原動力とする経済の成長は、同時にその社会的状況を再組織し、経済発展にふさわしい条件をつくり出すというのが後の見方である。前者は経済の存在論的制約を強調し、後者は経済そのもののもつ自己革新力を重要視する、ともいえる。

著者はこの枠組みの中で歴史学派をこう批判する。——「国民所得分析論を実証的に応用しようとするさい、

その応用のおわったあとに、いぜんとして歴史学派の問題がのこっている。この問題に対して、かれらが提唱した接近の方法は、決してみのり豊かなものではなかった。たとえば前期歴史学派が説いた世界史的動向と国民精神との関連とか、後期歴史学派が提唱した社会経済史的な実証研究とかは、経済形態論がふくむ方法的問題に対して、殆どなんらの理論的示唆をあたえるものではない。1つは経済理論をこえた形而上学であり、他は経済理論以前の調査にかかわるものであるからである。」さらに、この批判ののちにこう付言する。「これら歴史学派の方法論的問題の反省のなかから形成されたゾンバルト・ウェーバー流の経済意識説[経済形態の相違をもたらず基本的な要因は、経済意識における型の相違であるという主張]が、辛うじて検討に値するものをもっているにすぎない」(p. 172)。

著者は歴史学派を「形態論的な見方」に属せしめるようだ(「歴史学派こそ、国民経済の形態的差異の理解を、その基本問題としていた」p. 172.)が、しかし、他に、(A)家族に重点をおく(生活)慣行説(限界効用説、消費性向・流動性選好などの社会のコンヴェンションに注目するケインズ理論)、(B)制度説(政治的権威の制約に着眼するもの、パレート)など、現代社会科学の業績のうちにも形態論的思想は見出される。(著者は、以上の(A)、(B)に「ゾンバルト・ウェーバー流の経済意識説」を加えて「形態論的思想の3つの型」といっている。p. 186.)

古典派経済学についていえば、著者は、その自然的自由論(分業生産性説)のうちに「組織論的見解」をよみとろうとする(p. 174, 204.)が、巨視的次元における経済組織論を明示的に展開したのものとして著者が重視するのは、マーシャルとシュムペーターである(p. 174, 198, 206. なお、「歴史派経済学に見るような形態論的思想と社会主義経済学に示されたような組織論的な思想との対立」に言及してはいるが、立入って論じてはいない。p. 184.)

著者はこういう視角からこれまでの業績を批判的に摂取し、そこから「限界領域」の著想にすすみ、方法論の理論構成をかんがえるようである。ただ、読みながら感ずるのは、著者の意欲がたくましく、努力と苦心とが大きいだけに、すっきりした理解がなかなか得がたいことである。例えば、マーシャルとウェーバーとは、人間、とくに経済における人間理解において、実に深く共通している。一方を「組織論的」、他方を「形態論的」と対照できるであろうか。もっと立入って展開して蒙を啓いていただかねばならぬ点が、いくつか、残っているのではないか、という気がする。

本書の他の重要な側面を見るために、第1編Ⅲ「社会科学としての近代経済学」を見よう。

著者には、近代経済学発達3段階説という議論がある。第1段階、純粋経済学の時期、第2段階、経済変動論の時期、第3段階、ケインズ以後の長期動態論の時期、という3分法である(p. 42.)。著者によると、この第3段階にいたってはじめて、「歴史的秩序としての経済秩序」、あるいは「経済過程の内在的進化」というマルクスの問題を近代経済学がとり上げるようになった。

この「社会科学としての近代経済学」において著者があつかうのは、近代経済学のこの第3段階的な側面であるが、ここで著者はまず理論に数式的表現をあたえることから出発する。

まず、ペーム・パヴェルクの新賃金基金説を数学化し、次にマルクスの再生産表式を記号化し、これにロビンソンの動学体系を加える(pp. 88~105.)

以上の分析ののち、著者はケインズ理論に向い、それが注目している問題が、資本主義経済の2つの側面の交錯、すなわち、金利生活者(金融資本)的側面と企業者(産業資本)的側面との交錯、に他ならず、有名なJ・R・ヒックスの図表でいえば、前者をLM曲線が、後者をIS曲線があらわしていると見る(pp. 105~111.)

以上の説明において、数学的展開はきわめて清潔に整理されており、ヒックス図式によるケインズ革命の意味づけもすこぶる明快だが、しかしこれが「社会科学としての経済学」の充実な説明かと問われるならば、この章の表題にこの表現をえらんだ著者自身も、恐くこれを肯わぬであろう。

ここでこの問題に立入るつもりはないが、1つだけ気懸りなことがあるので言っておきたい。著者はかように巨視的理論(長期動態論、巨視的分配論など)をとりあげて「社会科学としての近代経済学」を論じている反面、名著『マーシャル』においてさへも、あの「経済学は日常ビジネスにおける人間の研究である」という命題を正面から取り上げていない(ようにおもわれる)。こういう点が私には物足りなく感じられる。

以上で本書の志向が或る程度あきらかになったとおもうが、今一度本書全体に立ちかえっていえば、応用的実際の学問としての経済学それ自体において、換言すれば、エコノミストの作業そのものの中から、方法論を説いていることは、本書の大きな貢献といっている。主題そのものが以前の華かさを失ったにもかかわらず、左右田博士以来の伝統をここまで推進した著者の努力を多としたい。

〔青山秀夫〕